

【うただ】

何が嫌いかといって、学芸会とか運動会とか、「会」の付くものが嫌いです。

いちばん嫌いなのが、ぼくの小学校恒例の毎月の「合唱会」です。

なぜなら、ぼくは歌が上手いので、いつも真ん中で歌わされるからです。

上手いならいいではないかとお思いでしょうが、ぼくはみんなの前で歌うのが好きではなく、みんなと一緒に歌うのが好きではなく、だれもいないところで、一人で歌うのが好きなのです。

一人で歌えばみんなと声を合わせる必要もないし、拍手をもらって頭を下げることもない。

たとえば真夜中、庭の便所への行帰りに歌うのなんかは大好き。

たとえば日曜日、だれもいない中山の洞穴の中で歌うのが大好き。

たとえば夕方、お使い帰りに寂しい躑躅峠（つつじとうげ）で歩きながら歌うのが大好き。

だれもいないところで一人で歌っていると、三回に一回くらいの割合で、どこからか拍手がきます。

拍手がくるのが妙なのか、毎回こないのが変なのか、どこからくるのかわからないのが謎なのか、とにかく拍手をもらう。

だれもいないところで歌っているのに、拍手がくるということは、どこかにだれかがいるということなのだろうが、人の気配がしない。

もしかすると、ぼくの歌にぼくが拍手をしているのかもしれない。

そう思って、歌が終わると、自分の手を見るのだが、ぼくは拍手をしていない。

こういう場合は、七割は耳の病気だと聞いたことがあるので、母親に耳の穴の掃除を頼んで、ついでに中をよく確認してもらったが、傷もないし赤くなってもいないと云う。

こういう場合は、三割は頭の病気だと聞いたことがあるので、母親に頭を叩いてもらったが、いつもと同じ音だと云う。

こうしてだんだん、ぼくは歌うことをしなくなっていったのです。